

亜麻に魅せられた人々

— 第2回亜麻まつり in 当別に参加して —

偶然に札幌のど真ん中で

見つけた亜麻の花

示等があるらしい。

小学生の時に、近所の農家のところで、
亜麻を見て以来まったく見ていない。

懐かしくて見てみたいという欲求と、

の街頭花壇の中に、青色の可憐な花を偶
然、見つけた。直感的に亜麻の花ではな
いかと思った。近づいてよく見ると紛れ
もなく亜麻の花そのものだった。

日本農業新聞の北海道版に「亜麻祭り」の予告記事が出ていた。

七月五日(日)、当別町の旧東裏小学校グ
ラウンドを会場に、亜麻の花(畑)の視

察、フォーク曲の「亜麻色の髪の乙女」

の歌唱コンクール、亜麻栽培の歴史の展

フォーク曲の「亜麻色の髪の乙女」の歌
唱コンクールも、大好きな歌だけに、魅
力的では非とも取材を兼ねて行ってみた
いという気になってきた。

そう思っているうちに、祭りの前日に、

札幌駅北口の傍にある「女性プラザ」前

れているのかと一瞬、考えたが、そうい
えば昔、この場所は「帝国製麻会社」と
いう会社があつたところだったことを思
い出した。

「そうか、そのことを忘れないように



（代表 走川貴美）の人達の手で植栽されたもので同市内の数箇所では植栽されている。

青色の可憐な花達

祭りの朝を迎えて、朝食も簡単に済ませ、七時半過ぎ我が家を車で出発した。一時間弱で目的地の会場に着いた。会場の傍には、昔、懐かしい風情をかもし出している旧東裏小学校の校舎が佇んでいた。

その傍には、祭りを盛り上げるイベントとして、地元で取れる農畜産物などを販売する出店が六〜七店ほど立ち並び、祭り参加者に声を掛けていた。

それらの店で販売されている農産物は、いずれも新鮮で市価より格安で販売されていたので早速アスパラ、ブロッコリー、新ジャガイモなどを購入した。

この後、亜麻の歴史などの展示パネルなども見たかったが、肝心の亜麻の花というのは午前中にしか咲かないという極めてはかない命だと聞いていたので、すぐ花見に参加する視察バスに乗った。

五分ほどで亜麻畑に着いた。畑一面に亜麻の花が咲き乱れているかと思いきや、残念ながら、それほどでもなく三分咲きという感じだった。

一ha強もあろうかと思うその亜麻畑は、大した広さと感心した。畑を全体的に見渡しても花は、あまり目立たなかつたが足元に目を移すとひっそりと結構咲いていた。屈んで花をよく見ると直径1cmほどの薄ブルー色の丁度、園芸種の「ネモフィラ」に似た感じの花が風に揺らいでいて、なかなか可憐な風情だった。

まさに「亜麻色の髪乙女」の瞳のようだった。

この圃場の亜麻の花は、後ほどの栽培

とどうか、そのことを偲ぼせるヨスガとして誰かが植えたんだ」と合点した。そう思うと余計に、明日の亜麻祭りには是非とも参加せねばならないという気が一層してきた。

※この亜麻の花は、札幌市内にある「亜麻とホップのフラワーロード」の会

組合長の話によると、後二三日で、満開を迎え畑一面が真っ青に染まるそうだ。そして午前中にはかなく命を終える花たちは、その後一斉に散って地面をこれまた真っ青に染めるといふ。

残念ながら、そのような光景を今回は見られなかったが、いつかはぜひ見たいと思つた。



亜麻を愛する人々によつて 四〇年振りに復活された同町の亜麻

視察バスに再び乗つて、会場に戻つた。次は肝心の亜麻栽培そのものについて関係者に話を聞くということで、栽培組合長さんに会いたいと思ひ、事務局に紹介してもらつた。

大塚利明さんがその人だつた。(有)大塚



農場の代表取締役で北海道農業法人会議の副会長でもある。

その大塚さんは、今回の祭りの実行委員会の委員長でもあつた。

祭りの真最中の大わらわの状況で恐縮ではあつたが、少し時間をいただいで亜麻栽培の経過を聞いた。以下、その内容の概要である。

大塚さんを中心とした生産組合の人達が、当地に亜麻を復活させたのは、今から九年前の二〇〇〇年の時だといふ。まさに同作物が当町から栽培されなくなつてから、なんと四〇年振りの栽培だつたといふことから、まさに劇的な復活だつた。

但し、以前の栽培は繊維用の栽培だったが、復活させた亜麻は種子用(油糧)だといふ。

種子には、現代の私たちの食生活に不足になりがちなn-3系脂肪酸に分類さ

れる良質な脂肪酸である「 α リノレン酸」が豊富に含まれているということもあつて、近年の健康ブームにも乗つて、一躍注目されるようになったという。

製品としては種から搾油された「亜麻仁油」だが、サプリメントとドレッシングがそれぞれ製造販売されている。それから製品の製造・販売を担っているのは、実は生産組合の大塚さん方ではなく、別の組織である加工会社と販売会社が、それぞれ担当するというように機能分担というか、連携しながら行つていくという。いずれにしても、生産組合としての正式のスタートは、一昨年の二〇〇七年だが、その生産組合の組合長でもある大塚さんは、最初から関わつてきており、それだけに亜麻にかける意気込みも大きいものがある。

その大塚組合長も、種子用栽培は全くの初めてのことだったので、大変苦労し

たという。これら種子用の栽培は、世界的には北米などが先進地だそうだが、全く初めての作物故、栽培方法などが判らなかつたためカナダから資料を取り寄せ、翻訳しながら試行錯誤を繰り返して取り組んできた。

「当初はわずか反当り一五kgほどしか取れなかつたものが、八年経つた去年は最高二〇〇kgも採つた人もいた。平均でも一二〇kgにもなつた」と語る。

現在、組合員は全部で八人。その栽培面積は八haになるそうで道内一だそうだが、これは同時に全国一でもあるそうだし、これも注目されるのは、この面積が全国の八割にも達するというから驚きだ。いかにマイナーの作物であるかということがお判りだろう。

栽培上の苦労としては「登録農薬がないため農薬が使えないこと。したがつて、無農薬・無除草剤での栽培となつて、た

いへん手間隙がかかる。しかし麦・大豆の機械類が使えるので、その面で新たな投資はかからない」という。

「反収も徐々に伸びてきており、今後さらに伸ばせる見込みもあることに加え、組合員もこれら亜麻栽培を輪作体系の一環として位置づけて取り組むようになって、今や経営的にもほぼ定着しつつあるとともに欠かせない作物の一つにもなつてきている。

他方、前記したように組合員が栽培した貴重な亜麻の種子を心待ちにして製品に作り上げ、それらを宣伝・販売する人達もいる。それと同時に見逃せないのは、同町の亜麻の歴史を振り返つて、その足跡を後世に伝えようという人達もいることである。

亜麻を復活させた人々

そこで、次に、生産者である大塚さん方を支えたというよりむしろ取り巻く人達が、それぞれの立場から、いかに同町の亜麻復活に尽力を果たしてきたかについて紹介しよう。

まずは大塚さんが作った貴重な亜麻の種を買い上げて製品に仕上げる部分を担っているのが、札幌の苗穂にある(有)亜麻公社である。

既に記したように、健康にもたいへん良い亜麻の種子から絞った亜麻仁油を製品化し消費者に届けて行きたいという願いで、(有)亜麻公社は、その生産者を当別町に求め、その白羽の矢を大塚さんに当たったのである。

他方、そのできた製品を宣伝・販売するのは、札幌の西町にある(有)ウイズユー

・コーポレーションである。

このように正に、生産者・加工業者・販売業者の三者が、それぞれ連携・機能分担をしながら取り組むというスタイルをとっている。

いうまでもなく、一人の者がこれらの役割を全て担うというのは、現実的にいろいろの面で困難である。やはり機能分担して取り組むことが適切である。

これら三者の連携した取り組みは、実は二〇〇六年に北海道経済産業局の支援を受けることにもなり「北海道亜麻ルネサンス」プロジェクトとして位置づけられたこともあつて極めてスムーズに事が進んだのである。

同町の亜麻栽培の復活に貢献した人として、もう一人紹介したい人が地元「当別新聞」の編集人である清水三喜雄氏である。

自分の娘さんの名前に「麻子」と名づ

けたくらい麻に関心のあつた同氏は、当別町には、かつて亜麻が栽培されていたのみならず、亜麻工場まであつたことを突き止め、そこで働いていたことのある

二人のおばあさんを訪ね、その貴重な体験談を聞きだすという取り組みをされた。

そして、それら体験談を後世の人達、とりわけ次代を担う子供たちには是非とも伝えて行きたいという願いで、創作民話「亜麻の花咲く村」を創り上げた。

このように清水氏は、当地の亜麻の栽培の歴史を掘り起こし、それを次代に伝えていくという役割を果たしてきているといえる。

以上のように、同町の亜麻の復活に関わった主な人達を紹介してきたが、このように様々な分野の人達が、「かつてあつた亜麻をもう一度、甦らせたい」という熱い願いの下、連携・奮闘した結果、物の見事、四〇年ぶりにその夢の実現に

こぎつけたということである。

亜麻色の髪の少女がチャンピオン に輝いた歌唱コンクール

大塚栽培組合長の話しを聞いた後、旧校舎内に入り、亜麻栽培の歴史パネルをはじめ、清水氏が制作した民話に添えられた原画（当別町教育委員会委員長大澤勉氏制作）を見たりして亜麻栽培についての知識を深めた。

十一時からは、今回の祭りのメインイベントでもあるフォーク曲「亜麻色の髪の乙女」の歌唱コンクールがあるということで特設舞台に移り一番前に陣取った。

このコンクールは、今年初めて開催するということで、主催者の人達の意気込みは大変なもので、コンクール審査委員長に同曲を歌ったグループサウンズ「ヴィレッジ・シンガーズ」のボーカル

担当の清水道夫氏をコンクールのためにわざわざ東京から呼ぶというものだった。

全部で八人の出場者がいたが、結局、札幌からきた小学六年生の、まさに「亜麻色の髪の少女」がものの見事、初代チャンピオンに輝いた。

昔、同グループのファンだったと思しい（実は筆者もその一人）元青年男女も多数、集まり大いに盛り上がった。

当別町で九年前に四〇年振りに蘇った淡いブルーの亜麻の花は、その花を愛する人達の手で、今や少しずつその数を増やし続け、それに伴う人々の様々な繋がりがそれこそ『花の輪』のように広がっている。

（元北海道農業会議職員・

平成二十一年七月九日記）

